

土木屋の読書と旅(7)

平成 31 年 1 月

「平成」最後の正月を迎えた。平成というよりもこれで昭和が終わったと感じる人も多いと聞く。昭和 45 年高校 2 年の夏、中学以来の友人が訪ねてきた。K 発酵工場長の息子である Y 君は道徳的にはルーズな男であったが、妙に生真面目なところもある不思議なキャラクターの持ち主で、その彼が真剣な顔で「悪いけど大津島まで一緒に行ってくれ」という。どうも父君から回天記念館に行って来いと厳命されたいらしい。父君は旧海軍出身者だそうだが、当時は私たちの身近に戦争体験者が数多くいた。

徳山港から小ぶりの連絡船で馬島港に着く。二人で軽口をたたきながら 10 分余りの徒歩で記念館に至る。入館すると空気が一変する。日頃はひょうきんな Y 君が厳粛な顔をして展示物をみている。

『上西徳美少尉の手紙

お父さん お父さんの鬚は痛かったです お母さん 情けは人の為ならず
忠範よ 最愛の弟よ 日本男児は御楯となれ 他に残すことなし
和ちゃん 私は海です 青い静かな海は常の私 逆巻く濤は怒れる私の顔
敏子 すくすくと伸びよ 兄さんはいつでも お前を見ているぞ 』

出征していく若者が祖国というよりも我が父母、兄弟姉妹のために言わざるを得なかったこととは何なのか。Y 君の父君が伝えたかったことが分かったような気がした。

港までの帰り、打ちっぱなしのコンクリートの薄暗いトンネルを抜けて基地遺物を見に行く。熱い圧倒的な空気の塊が瀬戸内海の青い海を平坦に押し付けている。回天発射台の朽ち始めているコンクリートが静謐な光と影のコントラストを形成する。ふたりとももう何も言えなかった。四半世紀前、この大津島の沖合に沖縄戦準備のため戦艦大和が投錨していたという。



私たちは”戦争を知らない子供たち“と言われ続けてきた。今は”戦争を知らない子供たち“と言ってくれる人たちもいなくなってしまう。正月ではあるが 2 冊紹介したい。

* * *

『帰らざる夏』(講談社) 加賀乙彦 : 1929 年生れ、精神科医。陸軍幼年学校在学中に敗戦を迎える。作者のことばでは、この小説は「二・二六事件の青年将校たちの母校として知られる幼年学校が舞台であり、時代の精神を最も忠実に、また極端に信じ込んだ少年たちの友情と挫折と破壊の物語」である。同書で谷崎潤一郎賞、『宣言』で日本文学大賞を受賞、日本芸術院会員。
『雲の墓標』(新潮社) 阿川弘之 : 1920 年生れ、東大国文科を繰り上げ卒業し、海軍予備学生として海軍に入る(S17)。自らの海軍体験をもとに書いたのが同書。志賀直哉に師事、『井上成美』で日本文学大賞を受賞、日本芸術院会員、日本李登輝友の会会長。作家・エッセイスト 阿川佐和子の父でもある。



* * *

このコラムも 7 回目となるので、タイトルをなぜ「土木」+「読書」+「旅」としたのかその思いを述べたい。もちろん、「私の職域」+「私の 2 つの趣味」の組み合わせであるから話題を整理しやすいというのが一番の理由であるが、常々私が考えている思いを上手く表現した文章があったので、少し長くなるがいつもどおり引用する。高野秀行氏の下記著書あとがきからの抜粋である。

土木屋の読書と旅(7)

平成 31 年 1 月

『辺境の怪書、歴史の驚書、ハードボイルド読書合戦』高野秀行・清水克行／集英社インターナショナル *高野氏は『謎の独立国家ソマリランド』(講談社)で講談社ノンフィクション賞、梅棹忠夫・山と探検文学賞を受賞している探検家・作家。



『 「ここではない何処か」を時間(歴史)と空間(旅もしくは辺境)という二つの軸で追及していくことは「ここが今どこなのか」を把握するために最も有力な手段なのだ。その体系的な知識と方法論を人は教養と呼ぶのではなかろうか。

もちろん、日常のルーティンワークにおいて、そんなことはほぼどうでもいい。だから往々にして教養は「役に立たない空疎な知識」として避けられ、今やその傾向はますます強まっている。でも、個人や集団や国家が何かを決断する時、自分たちの現在位置を知らずしてどうやって方向性を見定めることができるだろう。

その最も頼りになる羅針盤(現代風にいえばGPS機能)が旅と歴史であり、すなわち「教養」なのだ。と初めて肌身に感じたのだ。同時に五十歳を過ぎてそんな初歩的なことに気づくようだから、私の人生は迷走の繰り返しだったのだと腑に落ちた。でも重要な決断は人生あるいはその集団や国家が終わるまで必要とされるのであり、教養を学ぶのに遅すぎるということはないとも思うのである。』

* * *

たとえば、家族や知人に「土木」って何ですか?と聞かれたとき、あなたはどのように説明しますか。前もって準備しておかないとなかなか難しいのではないかと思います。

土木学会ホームページではこう説明しています。「普通の暮らしのためには、どこかで、誰かが、道や緑や川のことを考えていくことが必要なのかもしれません。それを考えていくのが土木の仕事です。土木は、英語で Civil engineering といいます。この Civil とは「市民」「文明」という意味です。つまり、土木(Civil engineering)とは、「市民のための工学」あるいは「市民の文明的な暮らしのために、人間らしい環境を整えていく仕事」を意味する言葉なのです。」

ただし、このままでは Civil engineering をなぜ「土木」という用語で表すのかは分からない。土木学会では次のような議論がなされている(土木学会全国大会コミュニケーション委員会討論会 2014. 9)。

- (1)中国では、「土木」はきわめて古い言葉であること(BC5世紀『国語』)。
- (2)土木「築土構木」(BC2世紀『淮南子』)由来説は明治以降でのことらしいこと。

*現代の目から見ても「築^と構^{ぼく}木」は土木の精神をよく表しており流布された説ではあるが、土木の語源である根拠は不明。戦後間もなくの頃、大阪大学に構築工学科という名称の学科があった。

- (3)日本では840年「日本後紀」が最初。近代では明治初期国の官職として「土木司」が始め。
- (4)学問名では明治7年の工部大学校で、講義名の「Civil engineering」を「土木学」に変えたのが最初。
- (5)日本のみ「土木」から建築構造が除かれ、建築に対比される「土木」となっている。

私も土木学会の一員であるが、どのように決着しているのか寡聞にして定かではない。

最後に、土木の世界をできるだけ多くの人に紹介するため、土木学会では2016年8月から「ドボ博」ホームページ(内容はまだまだ東京中心で、操作性も関連ページがサクサクつながらない)をスタートさせているので一度ご覧ください(土木学会のホームページからも入れます)。

古谷 健